

## 卒業論文の要旨

論文題目	推し活と博物館のあいだ ― 感情が生み出す文化的体験に着目して ―
氏名	中曽根綾芽
メジャー	コミュニケーション学
<p>(要旨)</p> <p>本研究は、“推し”と呼ばれている、自分の好きなアイドルやアーティスト、俳優、歴史上の人物や作品など、実在する人物から、2次元のアニメや漫画、ゲーム、キャラクター、さらに物などを愛でたり、応援したりする、「自分の好きなこと、もの、ひとを様々な方法で応援する活動」のことである「推し活」をきっかけとした博物館来館の実態に着目し、推し文化と博物館の関係性を明らかにすることを目的とした。近年、「推し」は人物に限らず、キャラクターや作品、さらには場所や空間等へも対象を広げている。本論文では、推しが博物館来館のきっかけとしてどのように機能しているのか、また推しを入口として展示内容や文化財への理解がどの程度促進されているのかについて検討を行った。</p> <p>次に、博物館の機能（収集・保存・研究・普及）と推し活を比較し、両者が対象への愛着を可視化し、共有する実践であるという共通点を発見した。また、推しと博物館がコラボレーションした事例を通じて、博物館が感情的に関与する場として機能しうることを示した。</p> <p>さらに、大学生と社会人の若者の推し活と、博物館・美術館の利用や意識との関係について、Google フォームを用いたアンケート調査を実施した。その結果、博物館に推しが関係する展示や企画があれば「ぜひ行きたい」「内容次第で行きたい」と回答した者が94.4%にのぼった。この結果から、推しは展示や規格の内容次第によって、博物館への来館動機を強く拡張させる要素となり得ることが明らかとなった。</p> <p>以上より、博物館は知識提供という場であることにとどまらず、推し活をきっかけとした来館は、その心理的な敷居を下げる役割を果たす可能性があるのではないかと考えられる。推し活という、この現代的な文化は、博物館との新たな関係性を構築する可能性を持ち合わせているということが判明した。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>本卒論は、自身の経験を踏まえ、近年話題の「推し活」行動を軸に、若者の博物館利用促進の方法などを検討した、極めてユニークでオリジナリティーあふれる内容である。また、博物館を「推し活」と結びつけるという考えは、若者ならではの発想といえる。今世紀に入り博物館利用者、とくに若者の利用が伸びない中で、どこの博物館も入館者対策に苦慮しているが、本卒論の成果の中にその一つの糸口があるのかもしれない。</p> <p>若者を対象に100人を超えるアンケート調査を行い、その分析結果も興味深い。「博物館と推し活の共通点」を見出し、「推し文化は博物館の新たな可能性を広げる要素を持っている」ことを明らかにした成果は大きいと考える。卒論規定文字数の倍となる、40,000字もの執筆に挑んだ労作と評価できる。</p>	